

ときめきリーフノベル

ある晴れた日の昼下がり

文・高安義郎 絵・芝 章一



ある晴れた日の昼下がり、和人の祖父が縁側のロッキングチェアに腰掛けて、中学生になった孫の和人が脇に座り、

「またお爺ちゃんの好きな歴史の話をしてよ。僕勉強は嫌いだけどお爺ちゃんの話は好きなんだ」

祖父はにっこり笑うと、

「カズは勉強が嫌いか」

「うん」確かに和人は勉強に興味が無く、通知表は「こそ無いが二と三ばかりだった。」

「おじいちゃん、どうして勉強しなくちゃいけないの」和人が聞いた。そこへ通りかかった母親が、

「大人になった時役に立つらしいからよ」すると祖父は「それは二の次さ」と言った。和人は、

「そらだよ、嫌いな化学式を覚えたって役に立たないし」

「大学に行けば嫌いな物は少しで好きな勉強が沢山やれるぞ」

「でも大学に入る時の試験にはいろんな科目があるじゃん」

和人の質問に、また母親が言った。

「大学は定員があるから落とす為よ」と、

「母親のお前がそんなにいい加減な考えじゃいけないなあ」

「あら、違うの？」

「ずれた母親だ。わしはそんなふうに育てた覚えはないぞ。お前もそこに座りなさい」

そう言って祖父は話し出した。

「勉強には将来役に立つものもあるが、心を豊かにすると同時に、文化の継承という目的がある。人類がこれまでに知り得た事を次の時代に引き継ぎ、それを更に次の人間に伝える作業だ」

「そんなの学校の先生がやれば良いじゃん」

「人間は一人で総てを深く学ぶことはできない。だから学校の先生は一つのことを詳しく勉強して、それを生徒に優しく伝える」

「先生は一科目だけなのに、僕たちはいろんな先生から沢山の科目を詰め込まれる。それっておかしくない？」

「生徒は浅く広く学べばいい。その中に何人が興味を持って深く勉強しようと思う者が出て来ればそれでいいんだ」

「世界中の誰も興味を持たなかったらその勉強はどうなるの」

「その科目は廃れて人間が知った知識や技術が一つ消えるわけだ」

「本に書いておけば良いじゃん」

「本があるってことをどうして知るんだい？」

「学校の先生が教えれば」

「そうさ。だから先生は広く浅くみんなに教える為にある」

「僕勉強の意味がわかんないし興味が無いってことは、頭が悪いからかなあ」

「そうじゃない。興味を持つ対象が見つかっていないだけだ。生きている間は全く無名だったゴッホという画家は二十七歳まで絵描きになろうとは思っていなかった。最初は牧師になって、それから絵に興味を持つようになった」

「もつと早く興味を持てば、生きていく内に有名になれたの？」

「興味を持つ速さと有名無名とは関係が無い。それは別の要素だ。だから和人も焦らなくていいから、興味が持てる物を見つけることだ」

「僕遊ぶことに興味があるよ」

「遊ぶことも結構。だが自分を精神的に高める物でなくては遣り甲斐が無いだろう。遊びの多くは単にもてあました時間を潰すだけだ。遊びはあくまでも張り詰めた心を緩めるためのものではないと踏み間違えるぞ」

すると母親が言った。

「あたし高校時代、父さんに言われて勉強したから成績は良かったけど、何の為に勉強するか考えなかったなあ。今では高校の勉強なんかみんな忘れちゃった。それを考えると勉強ってあんまり意味がなかったみたい」

「そう言う」と祖父はにっこり笑いながら、

「決して意味が無くなかない。先日お前は百人一首をもう一度勉強したいからって本を買ってきたじゃないか。高校時代の古典の勉強が今になって興味を引き出してくれたんだ。それに、お前が和人の父さんと付き合いだすきつかけは、高校時代に習った短歌『陸奥の信夫もじづり誰故に 乱れそめにし我ならなくに』この歌を書いて送ったのが最初だったって聞いてるぞ」

すると母さんはほんのり顔を赤くした。和人は勉強の意味が解りかけたように思えた。

「興味を探す為に勉強するのもいいかも」小声で呟いた。

和人の勉強態度が変わったのはこの時からだった。そしてその年の暮れの通知表は、不思議に二と三が無くなっていたのだった。